

木曽川文庫

木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
春号は、長良川河畔に開けた美濃市からその歴史と曾代用水の開発を中心に、歴史ドキュメントでは今回から、「輪中と信仰」をシリーズでお届けします。



美濃市

ふるさとの街・探訪記

長良川河畔の町として 発展した、美濃市

エリア・リポート

曾代用水事業と美濃市の新プロジェクト

気まぐれJOURNEY

伝統の町美濃に、 満ち足りた時間が流れる

歴史ドキュメント

日本人の心に息づく水への信仰心

TALK&TALK

『輪中の水神信仰』

民話の小箱

お姫の井戸

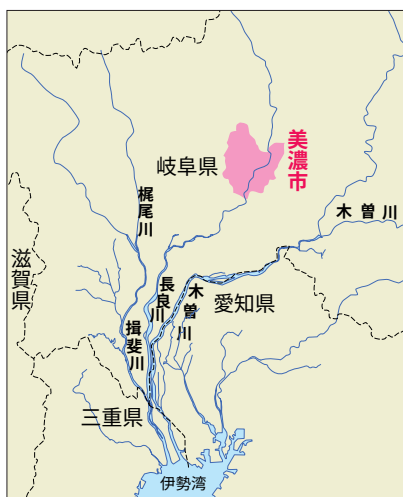




長良川河畔の町として

発展した美濃市

美濃市は長良川の清流と緑に包まれた町。紙の生産が始まったのは今から千三百年前。良質な美濃紙は全国的にも名を馳せました。江戸時代には金森長近が城下町や街道、上有知湊を整備。その構造は尾張藩領となつてからも継承され、この地方の政治・経済の中心地として成長を遂げました。現在は観光開発や住民参加のまちづくりが着々と進められています。



美濃市のあらまし

美濃市は長良川や板取川などの清流と舌城山・天王山そして松鞍山などの深い緑に包まれた自然豊かな町です。岐阜県のほぼ中央に位置し、面積の約八〇％は山林。南部の盆地平野では稲作や蔬菜栽培が行われています。

南北に長良川が貫流、西から流れてきた板取川と合流し、河岸の狭い河谷平地に集落が点在しています。板取川流域は牧谷といわれ、千三百年の伝統をもつ美濃和紙生産の中心地。山地を南流した長良川が盆地平野に出た谷口付近が市

の中心地で、政治・経済・交通の要衝です。岐阜市から国道一五六号が、美濃加茂市から長良川鉄道が通じており、東海北陸自動車道的美濃ICからは車でわずか三分。交通網も整備され、観光地としても発展しています。

喪山神話と丸山古窯跡

美濃市の長良川右岸地域には、日本最古の水場遺構が確認された渡来川北遺跡(縄文時代草創期)や王莽鏡が出土した美濃観音寺山古墳が所在し、多数の遺跡が調査されています。

古事記に記載されている喪山神話伝承地の喪山が大矢田にあり、この神話の主神・天若日子を祀る大矢田神社は養老年間(七一七〜二四)と伝えられています。



弥勒寺跡附丸山古窯跡

市一帯は牟婁都国造の置かれた所で、牟婁都君氏が支配。この氏寺として白鳳時代に建立されたと推定されるのが弥勒寺(関市池尻)です。

大矢田の南西部にある弥勒寺跡付丸山古窯跡は、弥勒寺の瓦が焼かれた遺跡です。昭和三年(一九五七)の発掘調査で四基の窯跡が確認され、古墳の終末年代を推定する重要な資料となっています。発見当時県内窯跡では最古であり、国指定の史跡として保存されています。

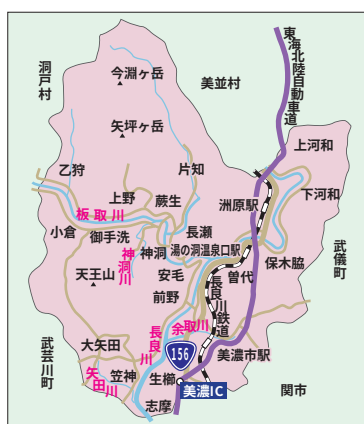
長良川河畔の上有知古町

平安時代以降、美濃市一帯は長良川河畔の上有知(旧美濃町)を中心に発達しました。平安中期の「倭名類聚抄」には上有知郷と記載されており、その後上有知郷と下有知郷に分かれました。上有知には摂関家の荘園があり、絹などが都へ納められていました。

平安末期から鎌倉時代にかけて上有知氏(神地氏ともいふ)と名乗る源氏の武将が存在し、また、室町時代には土岐氏の一族、浅野氏が代官を務めていました。

浅野氏は吉次の代になり所領を返上、文明年間(一四六九〜八七)のことでした。これは吉次が武士を嫌ったため、茶道をもって足利義政に仕えました。浅野氏はその後も上有知荘に住み、名門として明治期まで続きました。

天文年間(一五三七〜五五)、上有知は佐藤六左衛門の領地となり慶長五年(一六〇〇)まで佐藤氏三代が支配するところとなりました。佐藤氏は町の北東にあたる鉾尾山(四三七m)に山城を築城、急峻な山城は「釣かべの御要害」に御構えなされた鉾二丁にて何千騎にても防ぎ申す」と評され、戦国時代にふさわしい城でした。



ふるさとの街・探訪記



美濃市空撮

金森長近入部

慶長五年（一六〇〇）佐藤氏が関ヶ原の合戦に敗北すると、代わって金森長近が上有知を治めました。長近は本領の飛騨を養子可重に譲り、幼い実子長光を伴って上有知に入り、小倉山城を築城し城下町を造りました。現在の美濃市街地の原型はこの時のもの。以後、上有知は金森氏の本領飛騨と大阪や京都を結ぶ中継地として発展することになります。

長近の城下町経営と上有知湊

長近は越前・飛騨・美濃において生涯四つの城下町を造りましたが、これらには共通した特徴があります。

第一に戦国時代特有の山城を使わずに、新たに城地を定め築城しました。険しい山城は近くに城下町を造ることが困難であったためです。

第二に、武士と町人が混在する戦国時代の構造を一変させ、家臣の住む武家屋敷と町人が住む町を明確に区分しました。新しい形の城下町です。

第三に、町は城側より一番から何番かに幾筋かの大通りを通し、それをつなぐ幾筋かの横町で町割りを行いました。

町づくりの構想には、風水の思想が取り入れられていたようです。

慶長六年に入部した長近は佐藤氏の鉾尾山を廃棄し、長良川に面した尾崎丸山（二五九四）に築城。茶道に通じ文化人であった長近は、この山を京都の名勝にちなんで小倉山城と命名しました。

小倉山のほぼ南にあたる亀野と呼ばれる亀の甲のような台地が、新しく城下町が建設されたところです。それまでの城下町は小倉山から遠く水害の恐れが多かったため、この地を選んだようです。

また城下町の繁栄のため、郡上・飛騨や関・岐阜への道路はすべて城下町を通るようにしました。飛騨へ向かう津保街道をはじめ岐阜街道・関街道・郡上街道・武芸街道・牧谷街道がそれで、飛騨から



江戸時代の上有知の略図

の物資の集散地として、また美濃紙の流通経路として盛んに利用されるようになりました。

こうした陸路と水路を結んだのが、上有知湊です。金森長近は小倉山城と長良川河畔の窪地に湊を開きました。この湊より上流の長良川は、流れが荒く舟の運航が困難であったため、この地は湊として最適でした。上有知湊を飛騨の木材・白木類の市場とし、また岐阜中河原の木材市場への中継地として、舟運の発展を図りました。

その一方これらの物資の積荷作業が円滑にいくように四〇隻の番船を置き、またこのように上有知は屈指の一大物流拠



対岸から見た川湊

点として繁栄。慶長一三年（一六〇八）長近が病死し、慶長一六年、その子長光が病死し金森家が断絶した後も、長



清泰寺

近の城下町経営や上有知湊はそのまま受け継がれることとなりました。

江戸時代の上有知

金森家が滅亡すると、その領地の大半は幕府領となり、大久保長安の配下・石原清左衛門が代官として赴任しました。元和元年（一六一五）に尾張藩が成立すると、上有知付近は尾張藩に編入されました。小倉山城の本丸には代官所が設けられ、藤田民部の配下・瀬戸与兵衛がこの地方を治めることとなりました。その後尾張藩が直接統治した時代を経て、再び代官が復活。上有知はこの地方の政治・経済の中心地として発展していきま

美濃紙の発展

美濃市で紙が漉かれるようになったのは今から千三百年ほど前のこと。律令時代の戸籍や写経に使われていたようです。中世以前より良質な美濃紙はその名が

ふるさとの街・探訪記

村瀬太乙の南画



高く、主産地は牧谷（美濃市）と武芸谷（武芸川町）でした。京都の製紙場の支所が美濃国だけに置かれるほど、その技術は高く紙生産の先進国として大きな役割を果たしてきました。長良川の美しい水、楮などの紙の原料が豊富にあったことも要因のひとつです。

特に室町時代には、紙の需要が増大美濃で生産する美濃紙には、森下紙・薄紙・薄白・典貝帖・白河などがあり、扇の下紙・御草子紙・障子紙の材料として利用されました。

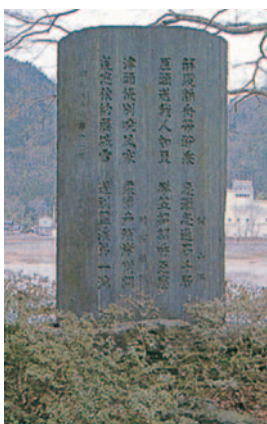
牧谷と武芸谷の中央に位置する大矢田では、京都の宝慈院を本所とする紙市が開かれていました。この紙市は当時としては珍しい月に六回市が立つ六歳市。近江国枝村（滋賀県大上郡豊郷町）の紙商人が紙座を結成し大矢田の紙を独占的に購入し京都へ運んでいました。現在大矢田には市場という地名があり、市神の石碑と六地藏がその名残をとどめています。

こうして繁栄した六歳市も戦国時代の戦乱により次第に運送が困難となり、紙座の独占権も失われて、枝村商人の往来も途絶えました。

しかし太平の江戸時代になると美濃紙

は、幕府御用紙として再び全国的に名を馳せることになりました。関ヶ原の合戦時徳川家康が紙祖と称される御手洗の庄司彦左衛門に采配をとるための紙を漉かせたところ大勝利したため、その報償として彦左衛門を紙漉屋に指定したからです。そして次第に紙商人も台頭し、元禄年間（一六八八～一七〇四）には小森彦三郎（大矢田）が江戸・大阪にまで販路を広げる富商となり、天保年間（一八三〇～一八四四）には武井助右衛門が尾張藩御用紙請負に成功して巨富を成しています。

村瀬藤城と頼山陽



頼山陽・村瀬藤城の詩碑（港町）

江戸末期の漢学者・村瀬藤城（二七九一～一八五三）は上有知の人で、頼山陽の高弟としても知られ、山陽もこの地を訪れています。

藤城は詩聖と呼ばれた梁川星巖とともに美濃国の文壇を勃興し、郷土に梅花

村舎塾を開いて若き郷党を教えています。また上有知村庄屋として飢饉救済、洪水災害復旧・曾代用水訴訟など、民政に力を注

いでいます。南画家の村瀬秋水・漢学者の村瀬太乙など、村瀬一門は多くの文化人を輩出しました。

製紙業の盛衰と交通整備

明治時代になるとこの地は名古屋・笠松県・今尾県・岐阜県などに所属。明治四四年（一九一一）、上有知を美濃紙の産地であることから、美濃町と改名しました。上有知が読みにくく、紙を全国に販売するには不便だと考えたからです。昭和二年（一九五四）には現在の美濃市が誕生しています。

美濃の製紙業は明治の後半から大正にかけて全盛期を迎え、明治六年（一八七三）ウィーン万博が開催されると、上有知の商人正村平兵衛が日本代表として美濃紙を出品しています。岐阜県の重要工業物となりました。しかしながら、手漉家内製紙を主体とするため近代工業化をすることができず、機械製紙の進捗と和紙需要減から昭和期に次第に衰退しました。現在は機械製紙と紙加工生産がほとんどで、手漉紙業者は僅少となり、その伝統技術保存のため、無形文化財本美濃紙として国の指定を受けています。

美濃町に改名された明治四四年（一九一一）、美濃町・岐阜間の電車が開通、紙や生糸の輸送が舟運だけでは不可能となり、民間有志の企画により岐阜県でも最も早く、岐阜市よりの郊外電車を開通させました。このため、一時は県下四大湊のひとつとして栄えた上有知湊は、江戸

時代からの歴史に幕を下ろしました。現在は九mの川湊灯台と船着場に名残をとどめ、上有知川湊跡として県指定史跡となっています。



ウィーン万博に出品された美濃紙

長良川舟運は郡上街道とともに郡上郡との交通路であり、美濃町はその中間の要地でしたが、大正二年（一九一三）に越美南線（現長良川鉄道・美濃・太田間が開通、さらに北濃まで伸びる）につれて、鉄路輸送が主流となり、昭和四〇年（一九六五）郡上街道（国道一五六号）が拡幅されるに及んで、自動車輸送の時代となりました。

平成一二年には、伝統的な美濃紙や文化を継承し、川や緑という自然の財産を未来へ引き継ぐために、美濃市第四次総合計画・美濃市二一世紀のグランドデザインを策定、また今年は市制施行五〇周年を迎えるに当たってさまざまな記念事業を展開、市民参加によるプロジェクトを着々と進めています。

■参考文献

『美濃市史』通史編 上巻 昭和五四年 美濃市
『美濃市の文化財』 平成二二年 美濃市教育委員会
『わたしたち美濃市』 平成一四年 美濃市教育委員会
『うだつの上がる町』 平成二二年 美濃市・美濃市教育委員会
『角川地名大辞典』 岐阜県 角川書店

曾代用水事業と 美濃市の新プロジェクト

曾代用水の成立とその後の改良事業



上有知・湊灯台付近の曾代用水

取入口から上有知・松森(現美濃市・下有知・関・小瀬(現関市)の各村を流れ、幹線水路二三km、灌漑面積一万三千ha開発された新田は最終的には五百haに及びました。

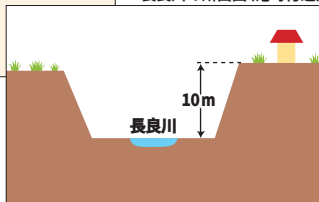
しかも、この用水は農民相互の話し合いで工事が成立した「百姓相対用水」といわれ、幕藩体制の権力による御用用水でなかったことは特筆すべきことであり、全国的にも稀な成立過程をもつ用水です。

成立以前の長良川は河床が低かったため本川からの取水はできず、小湊谷か

曾代用水の概略図



長良川の断面図(港町付近)



らの渓流水により灌漑してきましたが、その水量は乏しく、年々干ばつの被害を受け、収穫は極めて少ないものでした。このような地域に利水の施設ができなかった大きな理由として、江戸時代の複雑な所領関係が挙げられます。尾張藩領(曾代・中有知・小瀬、上州館林領(下有知・小瀬、旗本大島の采地(関などの領地が錯綜するこの地域一帯では、村々の間にも対立が生じており、広大な

山林原野の開墾や水利施設の新設、水田を造成することとは至難のことでした。用水開発を計画したのは喜田吉右衛門・林幽閑・柴山伊兵衛の三名です。喜田・林は兄弟で寛文初年(一六六一)、名古屋から関に移住した尾張藩の浪人、柴山は関の素封家で酒造業を営み、庄屋をも務める家柄の人物でした。

用水の計画



曾代用水付近を治めた領主

長良川の豊富な水は、の地に実りをもたらしましたが、その一方、河床が低いため、取水ができず灌漑には不便な土地柄でした。江戸時代に開削された曾代用水は、まさに画期的な事業。昭和以降も改良事業は継続し、豊かな水を送り込んでいます。現在では、川という資源を有効に生かすため、「まると川の駅構想」を策定、多彩なプロジェクトを実施しています。

寛文三年三氏は、綿密な実地踏査を行い、曾代地内の長良川左岸を取水地点の候補地とし、さらにその地点の標高を測量して、用水路の位置と勾配を決定しました。用水路は小倉山西麓の岩盤地帯を二〇m間トンネルとし、中有知・下有知・小瀬を経て、小瀬に至り長良川へ放流する路線を決定しました。計画の概略ができると、まず尾州藩主と関係領主の内諾を得、その年の暮れ、関係諸村にこれを示して賛同と協力を求めますが、これらの村々は領主が異なり利害が一致していないこともあって、交渉は難航。一〇ヶ月後に合意

を得るに至りました。

曾代・上有知は、用水路の最上流部にあたり、用水路線敷地に多くの水田が潰されるだけで新田は造成されず、これを補填するため新田が造成される各村から換地を提供することを条件に協定に応じました。松森は、用水路の開削により水田が潰され面積が減少しますが、荒地の開墾によって潰地を補充することができ、また用水路の上流部に位置し灌漑の便がよいため、畑から水田となる見込みもあるので換地を提供しないことで仮協定できました。下有知・関・小瀬は、小屋名も用水開削のため水田は減少しますが、従来の干ばつ被害を免れることができるばかりではなく、荒地の開墾、畑からの転換による水田造成ができるので、換地を提供することなく協定しました。

これら各村との協定は寛文四年までに整い、同年十一月には尾張藩からの免許も交付されました。しかし、原野二〇町歩の水田造成については館林藩の免許が必要となり願書を提出しましたが、館林藩からは六ヶ月経っても免許は下りません。館林藩ではこの大計画について技術的にも成否を懸念しており、しかも遠隔の地であったため、地理にも暗く、他領との関係も配慮した入念な調査が必要だと考えていたからでした。このことに焦慮した発起人は、旗本大島家に対して願書貫徹について助言を求めました。その努力は実り、寛文六

年（一六六六）、待望の指令書が出されました。この指令書は、濃州武儀郡下有知の荒地開墾並びに随意に着手してよろしい、しかし、出願の趣旨に反し、あるいは他集落に不都合のあるときは、造成した水田の没収をはじめ、用水路に対しても相当の処分を申し付けるといふものでした。

苦難を極めた開削工事

寛文七年、まず最大の難工事である上有知村の立岩の掘り抜きから始めました。当時は火薬のない時代。岩を焼いてはノミを振るう人力のみで堅い岩に挑み、砕いた岩はモッコで外へ搬出しました。また、松森の辺りは土地が高いため深く掘らなければなりませんでしたが、河原石がいっぱいで、深く掘ろうにも土や石がすぐ崩れてしまい、せちかく掘ったところもすぐ埋まってしまうこともありましたが、さらに、用水路線には谷川がいくつもあった



深く掘った用水（松森）



岩のトンネルを通る用水（立岩）

ため、谷川をまたいで用水路をかけなければなりませんでした。そのため、木でかけひという水路を作り、それを谷川などにかけて水路としました。

しかし、せちかく用水を開削しても雨のため土が崩れ、その度に工事をやり直さなければなりませんでした。

寛文九年（一六六九）、ついに幹線水路約一万三〇〇〇m、新田灌漑のための支線一万二〇〇〇mを新設し、排水路一五七〇mを完成させました。

これらの事業に要した費用は五千両余にのぼり、この他敷地買収費・家屋立退料・作物補償費等で五五五両が必要でした。寛文九年には、下有知村・関郷・小瀬村・小屋名村四ヶ村野方割帳によると、新田約一六〇町九反五畝を各村に分配しています。

その後の用水管理

しかし、寛文十二年（一六七二）の大洪水による施設被害の復旧に必要な経費の支出と、新田収量が予想外に低い

こともあり、用水の維持管理その他に困難を極めました。その前年には私財を投げつくした喜田は離脱。兄を失った林は用水への熱意を失い、延宝五年（一六七七）行方不明に。残る柴山は用水の維持に多額の支出をし、ついに家産を傾け、関郷に逼塞してしまいました。用水管理者を失った曾代用水は用水関係者で井組を作り、維持管理することとなりましたが、複雑な所領関係があるだけに曾代・上有知と井組四ヶ村（下有知・関・松森・小瀬の間で、敷地・貢租問題をめぐり多くの紛争を重ねてきました。しかし明治二年（一八八八）に至り、時の岐阜県知事山崎利準の調停により、解決しました。

なお、用水開削の功労者、柴山・喜田・林の三名の霊を祭るため、文化一〇年（一八二三）、下有知村神光寺境内に墓が造られ、その近くに井神社を創建



三人の碑（喜田（中央）林（右）柴山（左））

AREA REPORT

偉大な功績が称えられています。井神社の毎年八月一日の例祭には組合員一五〇〇余名が報恩と感謝の誠を表して祭りが行われています。

昭和の改良事業

その後、大小の修理改良を重ねてきましたが、昭和に入り、次の改良事業が実施されています。

一、昭和九年長良川の河床低下に伴い、取入口を六五〇m上流へ移設。水路一、八七九mの改修に着手し、昭和一二年に完成。これによって九、一五mの取水が可能となった。

二、昭和一六年より二期工事として一期工事に引き続き、一、三五〇mのコンクリート水路舗装を開始。昭和二〇年に完成。三、三期工事として、五、七三三mのコンクリート水路舗装工事を計画したが戦争のため中断。昭和三年より四二年にかけて、幹線水路九、七七四m、支線水路四、七六八mの舗装工事を行った。

四、四期工事として、灌漑排水事業曾代地区において昭和五七年から平成五年度に幹線水路六、二六五mの改良工事を行った。

五、五期工事として平成九年度からトンネル内六七三mの改良工事を実施中。

■参考文献

『わたしたちの美濃市』

平成一四年

美濃市教育委員会

『美濃市史』通史編 上巻 昭和五四年 美濃市

『木曾三川流域誌』 平成四年 建設省

(現国土交通省)

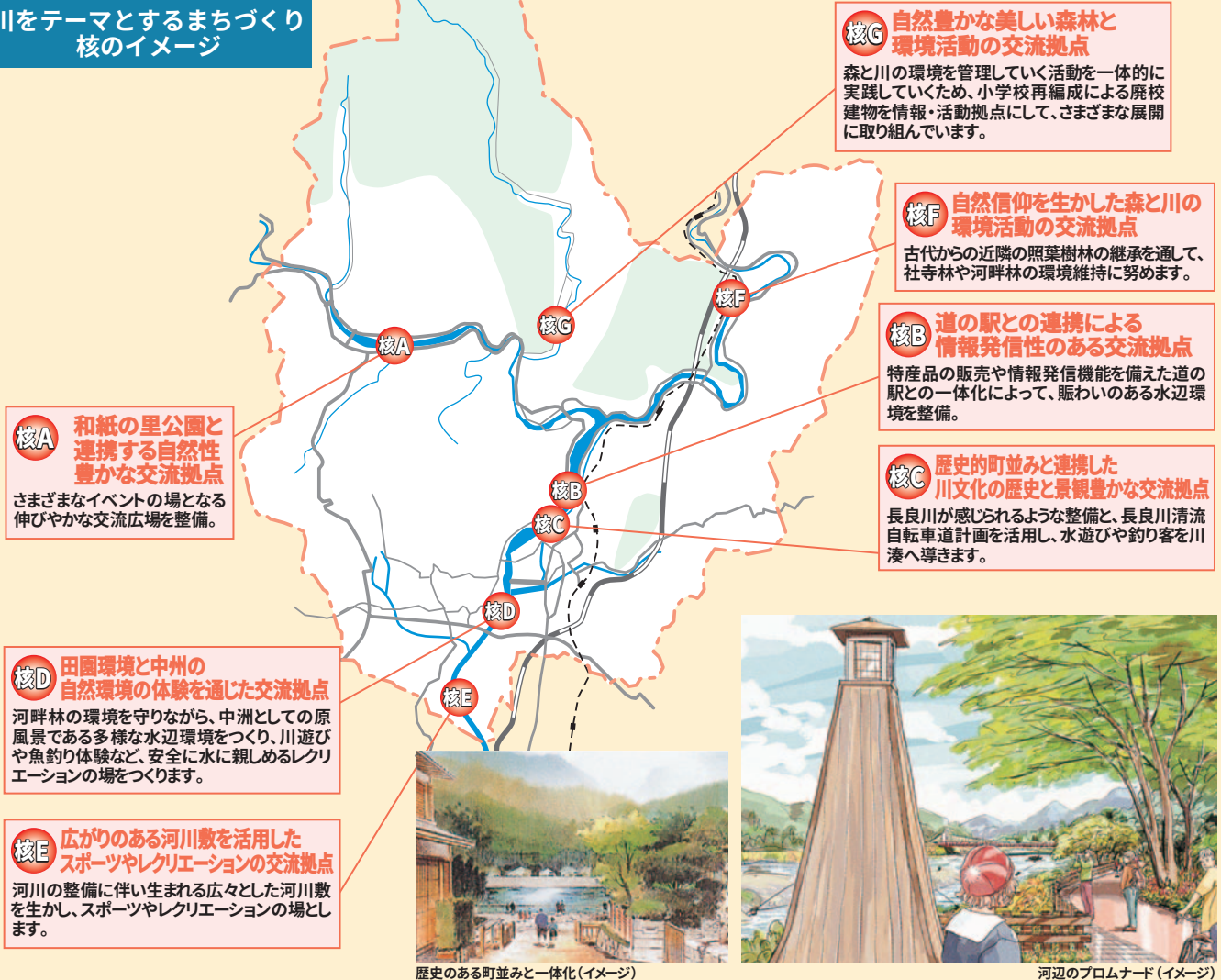
日本まん真ん中 美濃市 まるごと川の駅構想

平成14年に策定された本構想は、川がかかわる環境を大切にし、川の魅力を活かしたまちづくりを目指しています。

川をテーマとするまちづくり

- ・「森の環境づくり」
- ・「自然や水環境の保全と再生」
- ・「拠点となる環境づくり」
- ・「地域文化や伝統の継承・発展」

川をテーマとするまちづくり 核のイメージ



気ままに
JOURNEY

美濃市

伝統の町美濃に 満ち足りた時間が流れる

長良川の水面がいつそう輝き、小倉山が淡い桜色に包まれる頃、美濃にも華やきの季節がやってくる。町じゅうに響き渡る祭囃子の音色。春の陽射しを抱きとめるうだつ構えの町家。数百年の歳月を経て、なお、凛とした気品を放つ家並みには、人々の誇りと伝統を愛する心が満ち溢れているのであろう。歴史と伝統の町・美濃は、満ち足りた時を迎えているようだ。

河畔の町にも春の気配

名古屋から名神高速道路と東海北陸自動車道を利用して約一時間。車の窓を全開すれば、柔らかな風が春の気配を伝えてくれるようです。桜のつぼみも花開くときを今か今かと待ちわびているのでしょう。厳しい冬を乗り越えてやっと訪れる春。緑の山々も美しい川も、そして人々も、美濃の町は、微笑みをたたえて旅人を出迎えてくれました。

うだつの上がる町並み

うだつの上がる町並み

国道一五六号から少し南へ入ると、江戸時代へタイムトリップ。この家並みこそ、平成一一年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されたうだつの上がる町並みです。妻壁に上がったうだつ

その化粧瓦、格子に虫籠窓など、それぞれのにも息づく江戸の意匠は、日本人の繊細な感性の結晶といえるほどの傑作です。奥ゆかしさのなかにも、凛とした気品が漂っています。こんな町家には、小袖姿の小町娘がお似合いなのでしょう。今ではすっかり落ち着

いたたたずまいもかつては大変繁盛した商人の町。この町を象徴する「うだつ」が豪商たちのスエーダスシンボルでした。うだつとは隣家との間の妻壁を屋根よりも高くして防火壁とし、小屋根をつけたもので



小坂邸



小坂邸のうだつ

め、水害や地震に強い半面、水利に乏しく一度火災が発生すると大惨事になりました。しかも江戸時代の商家の建物には制限があり、ほぼ同じ高さの板葺きの屋根が並んでいました。この構造が類焼の原因に、火が屋根を走って、町全体が消失することもありましたが、そんな類焼を防ぐために、家と家との間に防火壁でもあるうだつを上げたわけです。その軒先の化粧瓦がうだつ飾りです。当初は機能を優先したシンブルなものでしたが、時代が経つにつれ、風雅なものになっていきました。「うだつが上がらない」という言葉は、ここから生まれ、うだつは富裕のシンボルとなっていたようです。ところがうだつはあくまで防火のためのもの意識されていたようで、屋根の高さが違ってくる坂道に面した商家では格が違って、も富裕であっても上げなかったようです。今もなお人々が暮らす町家。そんなうだつのある町のなかで、杉玉を飾る商家をみつけました。国の重要文化財に指定されている小坂良治邸(相生町)です。杉



旧今井邸内部

玉が示すように、ここは代々の造り酒屋安永(二七七)一八二〇初期に建築で、緩やかにふくらんだ起り屋根が特徴です。この屋根の曲線は重厚で美しく、上方文化の影響を受けているそうです。旧今井邸は泉町は、最も古い形式を残しているうだつの軒飾りです。鬼瓦が小さく、破風瓦の下に懸魚がないほか、破風瓦が左右それぞれ二枚ずつで構成されているのも、他のうだつ飾りには見られない特徴です。今井家は江戸時代からの紙問屋で、庄屋を務めた家柄です。平成六年に美濃市の所有となり、美濃史料館となつています。古川邸(常盤町)は慶応三年(一八六七)の大火の後、明治期に建てられたものの、この家屋は明治期最後のうだつ構えである隣家との間に空き地をとっているの

美・濃・市・の・歳・時・記

◆ひんこ祭り◆

日時：4月11(日)、11月23(祝)

場所：大矢田神社(美濃市大矢田)

「ピンコ、チャイコ、チャイチャイ、ホー」のお囃子が響き渡るひんこ祭り。大矢田神社の祭礼(4月第2土曜日の翌日の日曜日)と秋のもみじ祭期間中(11月23日)に演じられるもので、500年程前から伝えられており、平成11年に国選択無形民俗文化財に指定されています。

ひんこ祭りとは、稚児・獅子・渡りや狸・竜の舞、ピンコの舞の総称。その中でもピンコの舞は、大矢田神社に伝わる伝説を素朴な人形劇によって再現しています。農民が麦まきをしているところへ大蛇が現れ、農民を次々に襲いかかって飲み倒し、そこへ須佐之男命(すさのおのみこと)が現れて大蛇を退治するという物語。五穀豊穡への願いが込められています。



平成16年度 美濃市 EVENT INFORMATION

3月20(祝)～5月5(祝)	さくら祭り (市内)
4月10(土)	美濃まつり(花みこし、流し仁輪加)
4月11(日)	美濃まつり(山車、練り物、流し仁輪加)
4月11(日)	大矢田ひんこまつり(大矢田神社)
4月29(祝)～5月5(祝)	美濃町家回廊(うだつの上が町並み)
5月1(土)	市制施行50周年記念式典、子どもミュージカル(文化会館)
5月2(日)	美濃和紙ファッションコンテスト、町家ストリートライブ(うだつの上が町並み)
6月5(土)、6日(日)	創作音楽劇「紙すきのうた」(市文化会館)
8月1(日)	美濃市花火大会(長良川河畔)
10月9(土)、10日(日)	第11回美濃和紙あかりアート展(うだつの上が町並み)
10月23(土)～11月29(月)	2004公募 第17回全国和紙画展(美濃和紙の里会館)
11月13(土)、14(日)	第29回美濃市産業祭(市体育館)
11月23(祝)	大矢田ひんこまつり(大矢田神社)



●交通のご案内●

◆名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋IC 名神高速道路(約20分) 一宮JCT 東海北陸自動車道(約30分) 美濃IC 国道156号(約5分)

◆名古屋方面から公共交通機関をご利用の方

名古屋駅 名鉄バスセンター 高美濃線(約1時間30分)

●お問い合わせ●

◆美濃市役所◆

〒501-3792 岐阜県美濃市1350 TEL 0575-33-1122

勇壮な美濃まつり

美濃の形容詞は「うだつ」と「美濃紙」と「美濃まつり」。美しい桜がいつに開花すると、美濃まつりの始まりです。美濃まつりは「花みこし」「山車」「流し仁輪加」の三部から成り立つ八幡神社の祭礼です。

そしてうだつ構えの家並みを案内してくれるのが「町並み案内ボランティア」たちです。こうした活動を支援しているのはふるさとへのあふれるばかりの想いなのでしよう。誇りと深い愛情と。そんな心がうだつの町並みを支えているのです。

が特徴です。破風瓦や鬼瓦は装飾性に富み、懸魚もつけられた豪華な飾りはいわばうだつ飾りの完成形ともいえるものです。



ボランティア風景

花みこしは、美濃紙の産地らしく桜色に染めた紙の花をつけた「しな」を二五〇～三〇〇本、みこしの屋根に取り付けたもので、大小三〇余基の花みこしが「オイサツ、オイサツ」の掛け声とともににぎやかに市内を練りまわります。担ぐたびに揺れるみこしは、まるで美しい桜の花が乱舞しているかのようです。これだけの和紙の花をみこしに取り付けるのは大変な作業で、製作には連日苦勞を重ねたことです。平成六年からは、女性の花みこしも登場。熱気はますますパワーアップして、美濃の春を華麗に彩ります。

美濃まつり「花みこし」風景

演者の中心は各町内の若者です。太八車に立てた松の木に赤丸提灯をつけ、大太鼓・小太鼓・笛などで各町伝統のお囃子を流して歩き、町の辻々で熟演が繰り広げられます。その衣装も軽妙な美濃弁が特徴で、江戸時代から受け継がれてきた伝統芸能です。「仁輪加」の名は、二百年ほど前の祭礼の際、とんちの利く者が「にわか」に思いついたなどといつて町角で即興劇を演じたのが由来だといわれています。

は、国の選択無形民俗文化財に指定されています。仁輪加とは「落ち」のついた即興劇です。風刺と洒落をきかせた話術と動作が特徴で、江戸時代から受け継がれてきた伝統芸能です。「仁輪加」の名は、二百年ほど前の祭礼の際、とんちの利く者が「にわか」に思いついたなどといつて町角で即興劇を演じたのが由来だといわれています。

美濃まつり「山車」風景

輪中と信仰

第一編

日本人の心に息づく
水への信仰心

水は、民間信仰の対象でした。水神信仰をはじめ多くの祭りや習俗が伝えられています。これらの信仰は、五穀豊穡を祈り自然の恩恵に感謝するとともに、洪水から暮らしを守ろうとする庶民の素朴な願いといえます。また、今日のようにテレビもラジオもない時代のこと。祭りは庶民のささやかな娯楽でもありました。そんな信仰をシリーズで紹介します。

水と信仰

稲作をはじめ、川と暮らしが密接にかかわってきたわが国では、古くから川や水を司る神々を信仰してきました。水には聖なる力が備わっていると考えられ、信仰の対象となってきたのです。水に関する信仰は二つのタイプに分かれます。

一つは農業と灌漑の神としての水神信仰です。日本では山を水源とするところから、田畑に水を供給する神として、山の神や田の神の信仰が生まれました。木曽三川流域では古来水魔との闘いが永らく繰り返されてきたことを反映し、下流部を中心として水難除けの水神が多く、堤防脇やかつての決壊地点などに祀られていました。また、池や湖の水辺にも神が住むと考えられ、そこから河童などの妖怪も生まれました。

そしてもう一つは、穢れを洗い清めるものとしての水の力への信仰です。イザナギがイザナミを黄泉国へ訪ね、帰

つてから穢れを洗い流したという話はこの原型です。世界的にみても水への信仰はあり、キリスト教の洗礼の儀式や、ヒンズー教のガンジス川の浄化力への信仰も、水の力を神聖化したものです。わが国では、祭礼や神仏への祈願を行う時、水を浴びて心身の穢れを落とす水垢離の習慣が広く行われています。

また、聖泉信仰も多くの民族にみられます。各地の霊場では、そこから湧き出る水を浴びたり、飲んだりすると、病気が治るという風習が残されています。

水は生命活動の根源です。人類の文化は水の得られるところに発生したものであり、水に対する信仰は、民族を問わず生まれてきたようです。そこで、水にちなんだ信仰や文化、習俗を紹介しましょう。

水分神

水分とは「山や滝から流れ出た水が種々の方向に分かれる所」または「貯水を調節すること」を意味しています。こ

の言葉が示すように、水分神は、各地の水源になる川の上流や分水嶺に祭られおり、水の配分を司る神、または灌漑治水の神とされています。なかでも奈良県の宇太水分神社の水分信仰は盛んで、全国的な水利関係者の信仰を集めています。

岐阜県羽島市江吉良にある水除神社の祭神は、水分神です。元和五年（一六一九）逆川堤防水難の時、勧請されました。逆川はもともと木曽川の幹流で天正一四（一五八六）の大洪水により出現した河川です。木曽川水系の河川が伊勢湾を目指して南へ流れるのに対し北西へ逆に流れるため、この名が誕生しました。木曽川本流と長良川をつなぐように流れる逆川は舟運などに利用されましたが、木曽川本流が激しく流れ込む急流であったため水害を起こしていました。逆川が木曽川から分かれたことから、水分神が祀られたのでしょう。この神社の場合、灌漑治水ではなく水難除けの神であり、逆川に設けられた猿



羽島市江吉良の「水除神社」

水垢離

神仏に祈願するとき、冷水を浴びて心身を清浄にすること。これが「水垢離を取る」という日本古来の習俗です。イザナギの故事以降、厳しく守られてきました。神社や寺院の前には必ず、御手洗川や水垢離場、手水場などが設けられており、参詣する前に手を洗い、口



をすぎます。また海で海水を浴びるのに、塩浴びとして塩の呪力の効果もこめられています。

岐阜市の葛懸神社かつらがけでは、毎年二月「みそぎ祭り」が行われています。

ます。鉢巻に下帯姿の男たちが、神社から約三〇〇m離れた長良川の清流で身を清め、無病息災を祈願します。その起源は不詳ですが、応永年間(一二九四)の大飢饉から重要な祭儀となったようです。当時の川の流れは現在とはかなり違っており、天文三年(一五三四)の大洪水以前までは杜前の大池でみそぎを行っていました。

葛懸神社の祭神は水除神で、昭和三年(一九三二)に長良川堤防上から、現在地に移転しました。

河童

いたずらもの、もしくは水の妖怪です。水陸両棲で、四、五歳の子どものくらいの大きさで、口先はとがり、背には甲羅や鱗があり、手足には水かきがあります。また、頭には皿と呼ばれる少量の水が入っているくぼみがあり、その水が枯れると河童も死んでしまいます。

河童の起源には諸説がありますが、一般的には河童は水神の零落した姿だとされているようで、全国的に水難をもたらすものと考えられ、川祭りの主役を務めてきました。青森県の津軽地方

では、水死は河童の仕業で、水神様の家来であると伝えています。この河童の脅威を抑えるため、水虎様(スイコ)とかオシッコサマと呼ぶが祀られているようです。

このほか、河童が田の神・山の神とも深い関わりをもつ伝承も残されています。春には山から川へ下ってきたカワウタロウ(川太郎)となり、秋から冬にかけて山へ帰りヤマタロウ(山太郎)となるという伝承で、去来(きらい)の時期からみると、農耕の開始・終了と密接な関係があるのではないかと推測されます。

木曽川流域ではカワランバ・ドチ・ドチロベ・ドチロベイ・ノシ・ヌシなどと呼ばれ多くの伝説が残されています。

《揖斐郡藤橋村》

本郷の久野友太郎家では祖父の代まで河童伝授の薬を出していたようです。治兵衛という先祖が川へ手水を使いに行つた際に、河童が水の中からその手を引つ張つたとかで、



強力な治兵衛はあべこべに河童を捕まえ、庭の木に縛り付けたようです。その折

に河童が詫言を入れ、放免してもらうのと引き替えに薬の作り方を教えたそうです。この薬は、アカザ・鹿の角・合歡の木皮・十ハササゲ・葛の粉を混ぜ合わせて作るそうです。

《加茂郡坂祝村》

加茂郡では六月二六日に河童が尻子玉を取つて水神に供えるという言い伝えがあり、一六日以前には泳がないように子どもに注意していたようです。水に溺れる者は、泳いでいるうちに笑つたかと思うと水中に沈んで行く。これが河童に尻子玉を抜かれるときだと信じられており、水死者の肛門が開いているのはこのためだと言われていたようです。

雨乞

日照り続きのとき、雨の降ることを神仏に祈ること。鉦や太鼓を打ち鳴らし、山上に薪をたくさん積み上げ、これを燃やして騒ぐこともあります。雨乞いの儀式は世界中にありますが、鉦や煙を用いるものが多いようです。これは鉦の音が雷鳴、煙が黒雲を象徴して



笠松町円城寺の「神明神社」

いるからなのでしょう。このほか、水神が住む池や泉から水を汲んできて、これを氏神や水源地にまいたりすることもあります。

木曽三川流域にも雨乞い伝説は数多く伝えられています。科学の進歩した今日でさえ渇水になると雨乞い神事が行われており、一部には太鼓踊りなどの雨乞い踊りが民俗芸能として継承されています。

岐阜県笠松町の「円城寺古瓦踊り」や揖斐郡春日村の「鎌倉踊り」などの太鼓踊りは現在も行われています。

盆流し

悪疫払いの行事と行われます。愛知県津島市の津島神社では、六月二四日の夜に葦千本をたばねて、疫神を託して川に流します。これが流れ着いた所には必ず疫病が起るといわれています。流れ着いた所では、発見者を施主に祭りを行い、疫病を封じ込めます。愛知県の海岸では、流れ着いた葦を御葦天王社などの名で神社に祭る例もあります。

川祭り

六月と一二月の年二回、水の神を祭ります。川祭りという呼び方は九州地方に多く、大分県日田市の方灯流しも、この祭りの一種です。カワは古くは井戸のことでもあったから、井戸の祭りでもあるようです。

木曽三川流域では「笠松の川祭」「津島天王祭」「揖斐川町の川祭」などが有名です。

木曽三川下流域の水神信仰

洪水を恐れた輪中の人々は、古くから治水の水神を祭っています。水神に水害をお願いすると同時に、どのような神様にも、どのような宗派の仏様にも五穀豊穡・家内安全（水害にあわな）等々を祈ったとみられています。

輪中の水神は独立した立派な社殿をもつものから、境内神社として祭られているもの、石柱だけのものなどいろいろあります。

祭神は竜神である場合のほか、神明社・白髭社・多度社などを勧請して、水難除けにお祭りしたところもあり、一定したものではありませんでした。

この水神を誰が祭ったのかも、それぞれでした。大垣市大島のように藩主が創立し、社殿造営などは藩庁で行ったものもあれば、輪之内町東大敷の旧堤上にある神明神社のように、洗堰組合八ヶ村が勧請したものもあります。

このように各地の水神の成立経緯はそれぞれですが、次第に地元集落の神様となっていくケースが多いようです。なお、水神の祭礼は、九月、一〇月に

行われる場合が多く、洪水の時期と関係しているように思われます。

愛知県祖父江町の白髭神社は「洪水の前夜白髭の老翁が夢枕に立って村民に避難を勧告した」という白髭伝説を伝えていますが、これは広く日本全土に流布している伝説です。このため大きな河川の流域地に白髭神社は多く祀られています。



笠松町円城寺の「白髭神社」



木曽川町「木曽川神社」

また愛知県木曽町の木曽岬神社のようにいったん廃社されたものの、伊勢湾台風後の昭和三年（一九六〇）、伊勢湾台風犠牲者の霊を慰めるため、創建された神社

もあります。

輪中の水神の立地を見ると、その多くが堤防上にありました。明治以降の河川改修のため、それが堤防の中腹に移動したり、あるいは堤防から離れて他の神社の境内に末社として祭られている場合もありますが、元来は堤防上にあったようです。しかも単なる堤防上ではなく、破堤のあった場所、あるいは破堤の危険のある箇所而建てられていることが多いようです。この意味では、水防倉庫である郷倉の立地とよく似ています。

そのほか、輪中地域一般の神社が堤防上にあったり、自然堤防上にあった上、さらに基壇を盛土した上に社を設けていることが多いようです。これはいうまでもなく、信仰の中心である神社を洪水から守る必要があったからともいえます。そして同時に、神社の高い基壇そのものが住民の助命壇（命塚）として機能していたと考えられます。

加えて木曽三川流域の水神の傾向として、木曽川の扇状地開始点、つまり扇頂・大山の少し下流からは石の水神碑がめつかり減り、木製の祠の中に祀られた水神が増えてきます。扇状地では水神碑の使用できる形の良い大きな石が手に入りにくくなるためなのでしょう。

なお、輪中地域にはその戸数に比べて神社の数が多い特色をもちます。この理由の一つには、洪水時に神社が上

流から漂着したものをそのままそこに奉祀したことが挙げられます。近時はこれらの神々を合祀する場合もみられます。

三重県長島町の遠浅神明神社は天文二年（一五四四）に於多井川の川先に勧請された神社で、一説には天文二三年の大水のとき、上流から漂着した流れ宮を村人が拾い上げて勧請したものとされています。



長島町「小田江崎神社（遠浅神明神社）」

参考文献

- 『輪中―その展開と構造』 輪中研究グループ代表 経済学博士 安藤萬壽男著 古今書院
- 『木曽三川流域誌』 平成四年建設省 現国土交通省
- 『羽島市史』 羽島市
- 『祖父江町史』 祖父江町
- 『木曽岬町史』 木曽岬町
- 『国語辞典 言葉』 林大監修 小学館



『輪中の水神信仰』

海津町歴史民俗資料館特別指導員

瀬古尹宏氏



瀬古 尹宏氏

1935年生
最終学歴 岐阜大学 学芸学部社会学科
職歴 海津町立高須小学校長を最後に退職
著書 『ねうちづくりシリーズ』
『海津町史』
『図説羽島・南濃の歴史』
『定本長良川』等

はじめに

水神様は、水を司さる神です。その一つは「水豆知」^{みずち}「象罔女」^{みずはのめ}などの神が、井戸や湧水地や川の近くに祀られており、清らかな水が絶えることのないようにと祈りをささげられているものです。また農耕生活と関わり、この神々は雨乞いの祈りの対象ともなっています。このように水を恵む力をもつ神であり、一般にこの神をスイジン様と呼んでいます。いま一つは大水が発生して災害のないように祀られる神です。これは水難から人々を救う神であり、堤防の守護神でもあります。輪中地帯では普通この神をミズガミ様と呼んでいます。このミズガミ様にもいろいろな神が関わりますが、前者と異なつて水を拒む神です。ここでは後者について述べます。

堤防の守護神

大水が出て、堤防が切れ、その水が田

畑に大きな穴^{おっぼり}（押堀）をつくります。そしてその土砂が他の田を埋めてしまします。時には家が流され、死者が出るようになります。堤防の決壊は生産手段を奪い生死にかかわる出来事です。人々はこの恐怖から逃れるために水神様を祀りました。

「村北に八幡宮あり此松森の内北寄の地に近年領主より建たまひたる水神の宮あり…」

（尾張国地名考 高須領立野村）

とあります。産土神の境内に水神様を祀っていることがわかります。そしてそれは農氏の願いでありますが、同時に領主の願いでもあることがわかります。

薩摩藩によるお手伝い普請で、宝暦四年（二七五四）現羽島市加賀之井に逆川の洗堰が完成しました。このときに水神様を祀つたのですが、今でもその祠が残っており、地元の人々の信仰を集めています。



加賀之井の水神社

ます。

輪之内町大敷に建つ水神社は宝暦八年（二七五八）に大樽川の洗堰が自普請で完成したとき堰の傍に守護神として祀られたのです。それが、明治三十三年（二九〇〇）以後木曾川下流工事で大樽川が締め切られたとき現在地に移転したものです。江戸時代から一五〇年間洗堰を見守り、信仰を集めてきました。現在も地域の水神様として崇敬されています。



多芸島決潰守護神碑

このように水神様は、築堤されたときに水難除けとして祀られ、こともありますが、現存している水神社の多くはかつて決壊したところのある堤防上に安置されたり、その近くにありま。そして再び決壊しないようにと祈る祭は一般に決壊した日をあてています。

杭瀬川左岸多芸島にある水神様は、「決潰守護神」と大きく彫つた碑が水防倉庫の傍に建てられており、近くに「決壊地点 明治二十九年九月八日六時」と小さな碑が建てられています。そして毎年九月七日に祈願祭が催されています。



大垣市平町の水神社

す。

揖斐川右岸の新幹線鉄橋のすぐ近くの堤防上に大垣市平町の水神社があります。平町には大垣―一宮線の鉄橋ができるまで平の渡船があり、渡船の安全をも祈るために祠、灯明、碑の三点と地藏が揃った立派な水神社となっています。

長良川右岸の大池神社東の堤防は、文化十二年（二八一五）や明治二十九年（一八九六）に決壊した記録があります。堤切れの際の押堀が池になったところ。そしてそこに大池様（竜神）が水神様として祀られています。八月十日の祭には昔に比べると簡単になりましたが、花火が打ち上げられ、ホオズキ提灯を飾った舟が浮かべられます。

最近では、昭和五十一年（一九七六）の長良川右岸安八堤防切れの跡には、治水観音が建てられ、決壊の日にあたる九月十二日には毎年祈りが捧げられる

ています。

水神様を祀るのに堤防上には、祠もあります。皇太神宮と銘のついた常夜燈（灯明）が多いのはびっくりします。祭には、周囲に縄を張り幟を立てて、お供え物をして水難のないように祈ります。なぜ灯明が水神様なのか、私にはわかりませんが、①皇太神宮（天照大神）は、わが国土を創造されたものと神とされている。②舟で伊勢へいく道であり、もともとこの道しるべとして使われたものが、堤防の守護神として敬われるようになった。③輪中地帯はどの輪中でも伊勢講が盛んなことが示すように、伊勢（皇太神宮）に対する信仰が厚い。この辺りの伊勢講は、普通年一回講中の代表者が伊勢の内外宮に参拝します。その費用は、講が地区の全戸で構成されていますので地区費の中から出ます。海津町の辺りではかつては舟で桑名までいき汽車にのります。参拝ののち御幣を受けて帰ります。神社で報告したのち会食をして、終りに伊勢音頭を歌って解散します。④伊勢神宮領があつた。：。というようなお話を承けたまわったこと



長良川安八町決壊地点に建つ治水観音

があります。



海津町万寿新田の灯明様

さて、海津町万寿新田地区の灯明様には「江戸時代の終わりの頃であるが、堤防が切れないように」と伊勢神宮からお札をもらい、灯明様として堤防の樋門の上にお祀りをしていた。ある年のこと大雨が降り、樋門の横から水がもじりはじめ、堤防が切れかかったとき灯明様が、そのままうっそうと落ちてその場を埋めてくださった。お陰で堤防は崩れなくて済んだ。それから毎年九月十五日（註：決壊した日）には、村中の人々が集まって灯明様を中心にお祭りをするようになった。」という伝え話が残り、いまでも祭りは続いています。

このように太神宮の常夜灯が水神として信仰されているのは事実です。

いま一つよく水神様と呼ばれている神社に白鬚神社があります。

白鬚神社の祭神は猿田彦命です。猿田彦命は天孫降臨のとき、道案内をつとめた神といわれています。中世塞神（さいえのかみ）と混同されて道祖神となり、境

にあつて外部から村落へ侵入する疫病や悪霊などを防ぎ止めたり、追い払ったりする神となっています。また旅の神、邪鬼を塞ぐる神として信仰されています。水の侵入を塞ぐ意味で祀られているといえましょう。

禹王信仰

水神信仰の一つに「禹王信仰」があります。

「禹」中国古代の伝説上の聖王。夏王朝の始祖。治水に功を立て、舜から帝位を譲られ天下を治めた。その死後子の啓が諸侯から推され天子となったのが、中国における世襲王朝の始まりとされる。夏禹。大禹……

（国語大辞典 小学館）

海津町歴史民俗資料館に、次のような留書があります。

天保九戌九月

一当辺度々之入水二行御前御心痛被為在、御彫刻之大禹木像寄、江戸表より増田助太郎殿御預被罷登、帰国之上役所江引渡相成候上、仍内願諦観院江御安置と成ル。右之御さん被為在候掛物四幅内一幅須脇覚明寺江安置、一幅日下丸法円寺江安置、一幅萱野願信寺江安置、一幅秋江三ヶ寺へ安置、成ル。

但禹王木像、天保九戌九月十日詣

観院へ渡り成ル。外掛物四幅ハ
九月十五日夫々江渡二成。尤役所
江右請取ニ寺々ハ勿論右四ヶ村庄
屋組頭長百姓上下二而白木長持ヲ
為持請取ニ出ル歸リ之節 右長持
二大禹聖像一此通之堅絵付候
而歸宅之事。
(藤岡文書)

領主(註)十代高須藩主松平義建が
この辺りの水害に心を痛めて、江戸表よ
り禹の木像は諸観院へ、四幅の掛軸は城
下の四方にある寺へ安置したというので
す。

願信寺に現存する掛軸には、禹王像が
描かれていて右上に次のような意味の讀
があります。

「大いなる河は 流れ流れて萬世に長
く伝わる 一院に像を安置して 四辺
にその分身を分ける 領内は土地が低
く 毎年のように水厄にあう 民百姓
のおぼれ苦しむを救い こいねがわくば
安全を得んことを」

城下の人々が、この掛軸の禹王様に長
年にわたって水難のないことを祈っていたこ
とがよく理解できます。

禹王様は、海津町札野など地区の神



禹王の掛軸

社の境内摂
社の一つと
しても祀ら
れています。

また福束
輪中の悪水

を揖斐川

に排水す

る排水機

場の一つに

禹閘門とい

う名があ

ります。この名称も禹王からきています。

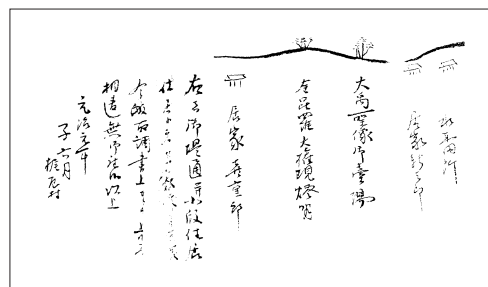
禹王様は、この輪中地域の水神の一つで

あることがよくわかります。

水神になった人々

高須輪中の南端から南へ伸びる千本松
原の内に昭和十三年(一九三八)に治水
神社が創設されました。この神社に祀ら
れているのは宝暦のお手伝い普請での薩摩
藩の犠牲者です。最初は、総奉行平田朝
負一神が祭神でしたが昭和二十九年の
宝暦治水二百年祭以後犠牲者全員が祭
神となりました。この神社のお礼は海津
郡の殆どどの家で祀られており、神社は
県内外の土木関係者をはじめた多くの
人々が参拝されています。

また瑞穂市内には、四つの川崎神社が
あります。瑞穂市の南部には、五六・牛
牧・古橋輪中の悪水を犀・五六・中川が
長良川へと運んでいます。ところが長良川
本流の河床が高くなつて、一たん大水に



禹王聖像の位置を示す文書(元治元年子六月梶島村)

なると長良川の濁流がこれらの河川に逆
流してこの地域一帯は何日間も湛水し
て、農作物の被害は甚大でした。

寛延二年(一七四九)本田(現瑞穂市)
の代官としてやってきた川崎平右衛門が
五六川の川口に逆流を防ぐ樋門を幸岳
の末、自普請ながら完成をさせました。
そしてこの地域を水害から守ったことか
ら、いまも町内四ヶ所に川崎神社があ
ります。平右衛門に感謝すると同時に水
難を除く神として信仰されています。

境川の左岸松枝輪中内柳津に畑繫太
神宮があります。宝暦の治水以後長良
川が増水するとその支流である境川に逆
流することが多くなりました。そして堤
防のない地域や低い地域に水が流れこん
できました。人々は畑と畑の間にあつた田
を埋めて畑にして、その畑と畑をつない
で土を盛り堤防らしきものを作りまし
た。しかしこれは取り払いの目に会いまし
た。その後代官所強訴した村役人四人
も投獄され獄死しています。

文化二年(一八〇五)着任した奉行酒
井七左衛門がそれを許可したことから
七左衛門と四人の農民が畑繫太神宮に
合祀されています。

平田町勝賀の神明社には、文化十二
年(一八二五)の洪水のとき人柱となつた
伊藤左平次が、若宮様と呼ばれて祀ら
れています。

これらの事は、史実は別として現在水
難除けや堤防守護の神として祈りの対象
となっています。

おわりに

以上述べてきましたが、受験期になる
と子どもたちが、どの神仏にも手を合わ
せるように、輪中の民も水害のないことを
どの神仏にも祈ります。この地域には航
海の安全を祈る金毘羅大権現が、あちこ
ちに安置されたり、池の主であるドツチ
(すづん)祭を催したりするところがあ
りますが、そんなときは水難ばかりでは
なく、水入りしないことも合わせて祈願
しています。だから広い意味でこれらの
神々も現実には、水神様と言えるでし
ょう。



畑繫神社の祭神に記された酒井七左衛門

参考文献

『尾張地名考』 海部郡教育会
『国語大辞典』 小学館
『柳津町史 柳津篇』
二協力

伊勢市 岡田芳幸氏
輪之内町 片野知二氏
大垣市 川合定正氏
海津町 北条英丸氏
海津町 藤岡靖子氏

民話の小箱

お姫の井戸 美濃市

庄屋の五兵衛さんは、空を見上げてため息をつきました。もう百日余り、雨は一滴も降らず、

田畑の作物はほとんど枯れてしまいました。

村の雨乞いも、三社百灯奉獻、七社千度詣り、

はては村をあげて雨乞いをする行事を二回繰り返しても、

雨が降る気配はありません。

思案にくれる五兵衛さんの頭に、「お姫の井戸」のことが浮かびました。

長良川には大巻の淵と呼ばれるところがあります。

川の流れる岸の大岩にぶつかり、大きな渦巻きができたためです。

その大岩のそばに「お姫の井戸」がありました。

丸い井戸のようなくぼみがあり、いつも青い水をたたえていました。

そこには大巻の主の龍神のお姫さまが住んでいるといわれ、

どんなに日照りが続いても、水が枯れることはありません。

「お姫の井戸」を汚せば、龍神の怒りにふれて必ず雨が降る、

村にはこんな言い伝えがありますが、

大洪水になる恐れがあるともいわれていました。

「最後の手段はこれしかない」

五兵衛さんは思いつめた険しい表情でついに決心しました。

そしてその夜「お姫の井戸」の水を手桶で汲み出すと、

不浄な板切れやゴミをかぶせて、火を放ったのです。

翌朝のことです。

突然、黒雲を引きさくような雷鳴がとどろくと、

激しい雨が降ってきました。

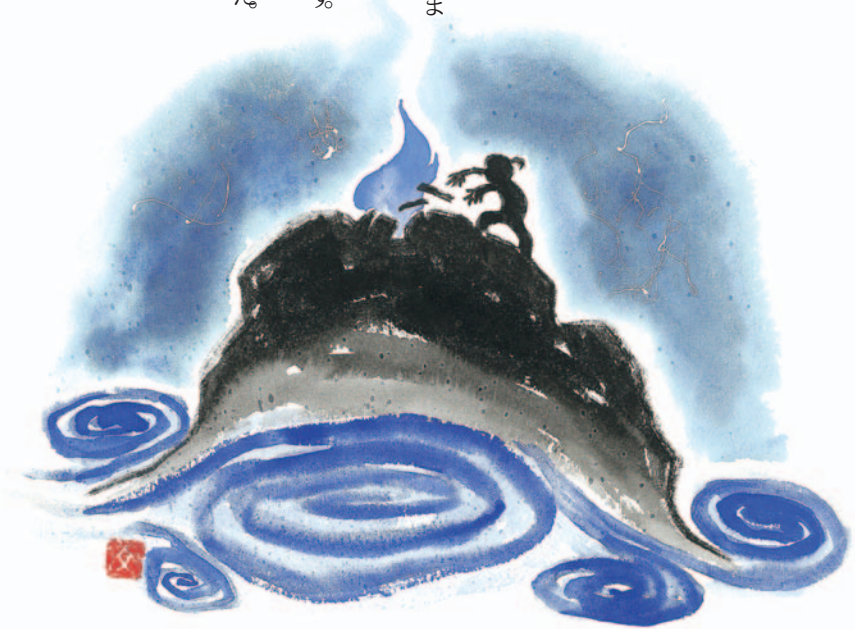
雨は三日間降り続き、止むことはありません。

「大水だ。堤が切れたぞ」

濁流の長良川は怒り狂う龍神のようです。

「雨だけを祈ったのに」

五兵衛さんは、ふたつと濁流に近づいていきました。



大雨は六日間降り続いて大洪水を起こし、

近郷の村々は家や田畑が流され、大きな被害を受けました。

五兵衛さんが行方知れずになたという噂は、

村中に知れわたりました。

五兵衛さんは洪水の見回り中、

あやまって川に落ちたのだとみなが思い込んでおり、

五兵衛さんのしたことも、その苦しい胸のうちも、

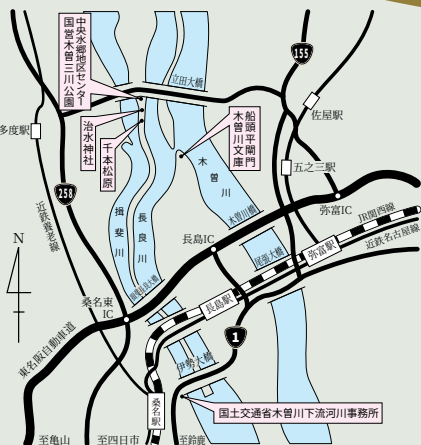
誰一人知る者はありませんでした。

「お姫の井戸」は旧美濃橋の上流にあり、昔のままです。

毎年八月一日の川祭りの日、

しめ縄を新しく張り替えて、お祭りします。

木曽川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分
《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入館料》無料
《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平岡門管理所・
木曽川文庫
〒496-0947 愛知県
海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233



●表紙写真● 上：小倉城跡の桜 中左：上有知湊の灯台 中右：井神社 下：長良川にかかる重要文化財：美濃橋

編集後記

弊紙では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、美濃市の皆様、及び瀬古尹宏氏にご協力いただきありがとうございます。ありがとうございました。お礼申し上げます。

今回は、宝暦治水250周年記念の特集号をお届けします。ご期待ください。

宛先 「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

木曽川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

『KISSO』Vol.50 平成16年4月発行

発行：国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所 〒511-0002三重県桑名市大字福島465 TEL (0594) 24-5715

木曽川下流河川事務所ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu>

制作：財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号（東海ビル） TEL (052) 565-1976